

農林水産省関東農政局長賞

「心をこめた『いただきます』を」

大和市立つきみ野中学校

1年 清水 陽翔

ふだん、僕たちは魚やお肉や野菜など、様々な動植物の「命」をいただいています。動植物たちの立場からすると、かわいそうと感じてしまいそうですが、これは僕たちが生きていくために必要なことなので、生き物たちに感謝し、ありがたく思うべきです。

そして、そういう「作った人や食材に使われた生き物たちに感謝する」という気持ちが込められているのが、「いただきます。」です。実は、「いただきます。」は日本独自の文化であり、海外には全くないのだそう。そのことを知ってから、僕は毎食前の「いただきます。」をよりていねいに、決しておこたることなくするようにになりました。作った人や動物への感謝を世界で唯一あいさつにし、ずっと先も感謝の気持ちを忘れないようにして礼を重んじる日本の先人たちに感動して、すばらしいと思つたからです。

ですが、最近みんなが普通に給食を残しているのを多く見かけます。嫌いなものならともかく、一口や二口だけ食べて残している人をたまに見つけると「嫌いなものなら頑張つて食べてよ！」と心の中でイライラしてしまうこともあります。その度に、みんなは心から「いただきます。」つて言っているのかな？ととても強く疑問に感じます。

みんながこんなちゅうちよなくごはんを残すのは、最近のこの世の中の食事情に深く関係していると僕は考えました。最近、外食店やスーパー、コンビニなどに行けばいつでも好きなものが食べれる時代です。つまり、自分で作らなくても好きなものが食べられるということは「ごはんを作る大変さ」を知る機会が減ってしまったということです。しかも、日本は食料自給率がとても低く、ほとんどの食料が輸入産です。つまり、国内産のものよりもどのようにしてつくられているかわかりづらく、その食材を作っている人たちへの感謝もうすれてしまいます。だから、みんなが普通に罪悪感なく、ごはんを残せるのかなと思います。

では、どうすればごはんのありがたみを知り、心から「いただきます」と言えるのでしょうか。僕なりに考えてみたら、「親の調理を手伝う」というのがいいと思います。実際に、最近はお活が忙しくてやれていませんが、僕も小学校高学年のときは手伝っていました。そこで感じたのは、調理は五感を全て使うということです。手先が器用でない僕は、手伝いだけでも大変で、ごはんのありがたみを感じました。

これまで、「どうしてみんなは罪悪感なくごはんを残すのか」など色々書いてきましたが、僕がこんなに強くごはんを残してほしくないと考えたのには、一つの理由があります。それは、「ごはんを残すと作った人や動物に失礼だから。」です。僕は以前、学校で残された給食を処理するためなのか大きな袋にまとめている調理員さんの姿を見かけたことがあります。その姿に僕は心を打たれました。僕の通っていた小学校は学校で直接給食を作っていたので、自分たちで一生けん命に作った給食をこんなに残されて悲しくないのかな……と深く考えさせられました。

このように、給食だけに限らず、ごはんを残すと作ってくれた人は悲しくなるし、とても失礼なことなので、親の調理を手伝うなどして料理のありがたみを知ることが大事なのです。これらを意識すれば、心からの感謝がこもった「いただきます」が聞こえてくるのではないかと思います。一人ひとりが食に感謝することを忘れない世の中になってほしいです。